ベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 op.125「合唱付き」

Ludwig van Beethoven: Symphony No. 9 in D minor, op.125, "Choral"

1824年5月7日、ベートーヴェン『交響曲第9番』（以下「第九」と略）が初演の日を迎える。ナポレオンの失脚後、ヨーロッパの中でもとりわけ厳しい思想統制がおこなわれていたウィーンにおいて…。

「第九」のテキストとして用いられたシラーの『歓喜に寄す』に、ベートーヴェンが初めて親しんだのは、20歳前後の頃と言われている。ただし1820年代に「第九」に本格的に取り組むようになって以降、この詩を用いるに当たって、彼は大幅な入れ替えやカット、さらには歌詞の加筆までおこなった。

もちろんそこには、思想統制下での検閲に備え、原詩の過激な要素を和らげる意図があった。だがそれにもまして、実際のフランス革命の精神がナポレオンの台頭等によって有名無実化される中、政治革命を通じた世直しへのメッセージ以上に、普遍的な兄弟愛による新たな世界創造のメッセージを、ベートーヴェンが放とうとしたためではないか?この作品が破格のスケールを具えているのも、「闇から光」に至る苦闘の道のりを、作曲者とともに聴衆にも追体験してもらう狙いがあってのことだろう。

例えば、第1楽章の最後には葬送行進曲風の曲想が現れる。それを聴けば、この楽章を貫く闘いの音楽が、実はその闘いに斃（たお）れた者に対する追悼に収斂する、というメッセージに気づかされるだろう。あるいは、その意味合いが第4楽章に至って、「兄弟愛」というメッセージの中へ昇華されてゆくことも。（しかもそのメッセージは、器楽曲の一ジャンルである交響曲に声楽を用いるという「禁じ手」さえまで用いて実現されるのだ。）

となれば、よく分かる。狂騒的なリズムの中にティンパニが不気味な警告音を発する第2楽章も、天国的な長さと美しさが特徴の第3楽章も、すべては作品の結論部分ともいえる第4楽章の理想世界に至るためのものだったということが。

そうした世界の実現を追い求めて、「第九」は響き続ける。コロナ禍の中にありながら、それを乗り越えようと様々な闘いがおこなわれているこの世界においても。

小宮 正安
（ヨーロッパ文化史研究家）

楽器編成	ソプラノ独唱、メゾ・ソプラノ独唱、テノール独唱、バリトン独唱、合唱 フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2 コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2 バス・トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、弦楽5部